

## 第3版序文

わが国の医療現場に「根拠に基づいた医療（evidence-based medicine：EBM）」が導入されて既に久しい。EBMでは、目の前の患者の問題をできる限り定式化し、それを解決する医学情報を検索して十分吟味した上で患者に適用されます。その際には、臨床状況や患者の意向などあらゆる角度から検討し、最良の選択肢を患者と相談して決定することが大切です。ここで言う医学情報は、主に臨床研究に基づくエビデンスですが、そのレベルはさまざまであり、それらを批判的に吟味するには膨大な労力を要します。診療ガイドラインは、最新の医学情報を専門家集団が十分吟味し分かりやすくまとめた指針であり、医療現場において適切な診断と治療の助けとなります。近年、診療ガイドラインが各領域で整備され、今やガイドラインのない医療分野はないといっても過言ではありません。

がん診療ガイドラインは、日本癌治療学会が中心となり、各専門学会や研究会において国内外で行われた臨床試験、臨床研究で得られた科学的根拠に基づき各作成委員会で検討しコンセンサスを得て作成されています。日本小児血液・がん学会では、小児がん領域と小児白血病領域の診療ガイドラインを担当しており、「小児白血病・リンパ腫診療ガイドライン 2016年版」は、前身の日本小児血液学会時代に掲載した初版（2007年）、第2版（2011年）に続く第3版です。今回新たに、疾患としてランゲルハンス細胞組織球症、および、支持療法としてがん疼痛の管理が加わりました。支持療法は、小児血液腫瘍のみならず、小児固形腫瘍の診療に共通するものであり、今後独立した冊子を目指すことになると思われます。

本ガイドラインで採用されているエビデンスは、国内臨床研究に基づく根拠も多く含まれており、わが国の医療事情を一定反映しているものと思われます。小児白血病領域では、40年を超える多施設共同臨床研究の歴史がありますが、2003年に全国の研究グループが統一されて日本小児白血病リンパ腫研究グループ（JPLSG）が設立され、名実ともに質の高い臨床試験が可能になりました。また、昨年には小児固形腫瘍研究グループと合体して日本小児がん研究グループ（JCCG）としてより大きく成長しており、世界にエビデンスを発信する原動力として期待されます。

本ガイドラインは、実際に診療に担当する医師が特定の臨床状況において適切な判断を下せるように体系的に作成されていますが、ガイドラインで示された治療方法がすべての患者に適するとは限らないため、個々の患者の臨床状況や希望を勘案した上で治療方針を決定することが大切です。とはいえ、本ガイドラインが血液腫瘍を専門とする医師のみならず、すべての医療スタッフと患者・家族の情報共有の架け橋となり、小児血液腫瘍患者の適切な治療選択に役立つことを切に願っています。

平成28年2月

日本小児血液・がん学会前理事長

独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター臨床研究センター

堀部 敬三